



カスガイ

楓
双葉

テルヨ。

僕は君と別れてからも、毎日毎日君の事を考えてる。

君と離れてからの僕の部屋は散らかり放題で、その散らかった物の一つ一つが君の事を思い出させる。そして僕は、君の面影を消そうとよけいに物を乱雑に置き、僕は僕自身を、ごまかそうとしてるんだ。

テルヨがいなくなって、今日でちょうど3ヶ月になる。

僕はアルバムをめくりながら、また君の事を考えていた。君と別れた季節がもう、さよならを告げようとしている、溜め息交じりの半休の午後。

僕は今でもまだ、無意識にテルヨの姿を探してしまう。トイレに立つ時、流しで料理をする時、ドアを開ける瞬間、朝、目が覚めた瞬間に。

僕は、アルバムに目を通しながら実際には見ていなくて、ただ白い厚紙に張られた写真の、白や黒や黄色や、赤や緑を目に反射させているだけなんだ。

ぼんやりとただ、テルヨの唇の内側の粘膜の感触や、抱いた時のぬくもりや柔らかさを思い浮かべながら、窓から射す西日にさらされていた。

カーテンの、青と黄色のチェック模様が、緑色に見えた。夕日のオレンジがそうさせた。

僕はうすうす感づいている。こんな事をしていても駄目だと。

僕はそれから少しの間目を閉じ、自分に正直に生きる決心をする。そして心が固まったのを合図に、僕は歯を磨きに行く。

いつも何か大事な事を決める時、僕は歯を磨く。テルヨはそんな時いつも僕にじゃれ付いて茶化したりしたなあ。

テルヨがいなくなって、邪魔されることが無くなって、僕は思ったんだ。邪魔なんていくらでもしてくれていい、僕には君が、どんなに大切な存在だったか、嫌という程思い知ったから。

歯をせわしなく磨き、両手ですくった水道水を口に含むとますます勇気が出てきた。

ガボガボと、口の要領いっぱいを含んだ水を口腔内で勢いよくジャグリングすると、一気に吐き出す。

「テルヨ、待ってろよ！」

声に出すと、僕は両手に力がみなぎってきたような気になって、脇の下で強く、ガッツポーズをした。

テルヨの居場所はわかっている。

問題は どうやって連れ出すか、だ。僕は推理やミステリー系の小説は読まない。ましてや完全犯罪など、今まで生きてきて一度だって考える機会など無かった。

僕はいつだって、情けない奴だった。

そしていつしかそれを、僕自身の個性として受け入れるようになり、必要以上に情けなく振舞わなければいけないような場面にも出くわすようになった。

僕は、僕自身の中からあふれる男らしさを押さえ込む事で、他人から受ける印象を整えなければいけなかった。そういった心のひずみは、明らかなストレスを与え、僕はそんな日々の中で、自分が本当に思っている事さえ何なのかわからなくなっていた。

そんな時、テルヨは僕に多大な信頼を寄せてくれた。僕は、テルヨの前でだけは、強かった。男になれた。僕の事を、心から愛し、信じて付いてきてくれたんだ。僕はテルヨという事で、やっと自分の居場所を確保できた。

僕はまたあの、唯一無二の僕の居場所を取り戻すために、テルヨをこの腕に、連れ戻す。

テルヨは今の時間なら、一人のはずだ。

テルヨがいるのは小さなコーポで、ベランダ側の裏の駐車場は、ひとけも少ない。

排水のポールに足を掛け、壁沿いに上っていけばテルヨのいる部屋の階までたどり着く。

僕は工具セットの中からベランダのガラス戸を開けるための小さなかなづちとマイナスドライバーを取り出し、ほくそ笑む。テルヨのコーポは近隣に私鉄の線路があり、快速が通った時なんかは会話にならないほどの轟音がする。多少の物音では周囲の住人も不審に思わないはずだ。

僕は今までに、何度も構想を練りながら下見していたのだ。捕まったって構わない。ピッキングがうまく行かなかつたら迷うことなくガラスをぶち破るだろう。そしてテルヨをこの胸に抱きしめ、一緒に逃げる。

完璧だ。

計画の成功を確信し、部屋の電気を見上げると、太陽に向かって叫ぶような気持ちで、「シャー！」と、吠えた。

カーキのジャンパーを羽織り、ジーパンの後ろポケットにかなづちとドライバーを差し込み何か必要な物が浮かんだ時のために千円札を前ポケットにねじ込む。

部屋を出ると、夕日の紫は遠くで民家の屋根の上をぼんやり包み込んで、夜の闇が空を覆い始めていた。なかなか付かないライターのように、小さな火花を散らしながら古い街灯が点滅している。僕は視界の隅にそれを流し見ながら、テルヨのところへ急ぐ。スニーカーをはいた足取りはとても軽く、大きなストライドで走る。最初はゆっくり、そして徐々に力強く。

「テルヨ、待ってろよ」

もうすぐ会える、という喜びとうれしさで、胸が熱くなる。内側から発せられた熱は、やがて僕の顔を蒸気させた。

コーポにたどり着いた時にはもう、空の紫は僕の背中の中で幕を下ろしていた。

僕は工具とお金の他にポケットに入れていた、大事な物が碎けていないかポケットの生地の上からそっとなぞって確かめる。大丈夫だ。

「よし」

三浦コーポ、と書いてある入り口に目をやると、一人の女が集合ポストの一つを開けて、覗き込んでいた。

僕は息が上がったまま、一歩、二歩と女に近づいた。

女が顔を上げ、僕を一瞥するのと同時に、冷凍されたバラが碎け散るように、いともたやすく計画が粉碎するのを感じた。

ああああ……もうだめだ。

女は僕にもう一度目をやり、眉間にしわを寄せ、左側の唇だけ動かして言葉を発した。

「何してんのよ」

冷たく言い放たれた言葉に僕はすっかり自信を失くす。

汗だくで息遣いの荒い僕を、女は干からびたミミズを見たときと同じ顔で見ている。

「テ、テルヨを返してもらいに来た」

勇気を振り絞って言う。ここで引き下がるわけにはいかない。僕は、僕の欠けてしまった半分を取り戻しにきたんだ。

「ばっかじゃないのお？」

女はポストから取り出した数枚のチラシと夕刊を片手に握り締め、コーポの奥へ背中を向けて歩き始める。

「ば、ばかではない！」

自分でも情けないと思う。こんな時に、こんな言葉しか出ないなんて。

「帰ってよ！」女はポストから出したDMや新聞に目を通す振りをしながら僕を見ずに言う。「帰らない！」僕が僕なりにくっついてかかると、女は立ち止まった。仁王立ちで背中に怒りを露にしたその女の、どこが好きだったのだろうか。

なぜ一緒に二年も暮らしていたのだろうか、と思う。

「美穂……」

僕が呼びかけても振り向く事はしない。ゆっくりと、また背を向けて歩き出すその姿が、今、とても怖い。

「テ、テルヨに……会わせてくれ！」僕は、僕は涙が出てきてしまう。テルヨの手触り、息遣い。あのまんまるい目がすぐそばにあるのだと思うと、もう、僕自身の弱さとか、恥ずかしさとか、そんな事どうでもよくて、この、美穂という女が、仕方なく僕にテルヨを渡すまで、僕は今日は帰らない。絶対に帰らないぞ！

「なに泣いてんの？さぶっ。」美穂は首だけ回して振り返り、僕を手短に罵倒した。僕はたまらず大声を出す。

「テールーヨォー！」もう一回！さっきより深く息を吸い込む。

「すうー。テールー……ブ、ブムッ」

「大声出すんじゃないわよ！」

僕の口元を覆い、指で頬の骨をロックした美穂の右手は微妙に左右に揺さぶりをかけた後、乱暴に振り解かれる。汗と涙と鼻水の混じった液体の付いた右手を、美穂はコーポに入ってすぐの101号室の橋口と表札に書いてある家のドアに擦り付けて、きいゆうー、という音が響いた。

橋口さんのドアのえんじ色は、美穂が右手を擦り付けた部分だけ濃くて鮮やかなあずき色に変色した。

僕を睨み付ける美穂は、あごで僕を奥へうながす。え？行っていいんですか？という気持ちになるがここはぐっと堪えて、なるべく背筋をピンと伸ばし、美穂の後に続いてコーポの錆びれた階段を登る。

今一度、ズボンのポケットに入ったテルヨの好物を生地の上からなぞると、ビスケットの骨の形が指先から感じられた。僕が目頭からまた涙の雫がぽろりとかぼれる。

「ちょっと待ってて」

冷たい視線のまま美穂は言う、ドアを自分が入れる最小限の幅だけ開けて、入っていった。僕はテルヨに会える喜びと感動で、なぜか強烈に尿意をもよおしていた。内股で膝をすり合わせていると三十秒程で美穂がドアを薄く開けた。

「会うだけよ」

顔だけ出した美穂の背後にテルヨの姿を探し、背伸びして覗いたが暗くてよく見えない。

「見ないでよ」

「はぁ……ごめん」

「会いに来たんでしょ」

「……うん」

「会ったら帰ってよ」

僕は尿意と嬉しさと緊張で、本来の目的を見失い、その上表情が定まらず、のどの奥から気張るような声をもらす。すると後ろから、正確に言うと足元から、「フッフッフッフ」
とテルヨの鼻息が聞こえた。

「テルヨー！はあああ！」

美穂の足元から顔を覗かせたテルヨに僕は呼びかける。

そこには頭のとっぺんに黒いぶち模様のついた、乳白色の肌のテルヨがいた。テルヨは鼻で必死に匂いを嗅ごうとしている。僕がすかさずしゃがみこみ、テルヨに手を伸ばすと、「ちょっと。」という声と同時に美穂の膝が僕とテルヨの間をさえぎった。

「なんでえ」僕が言うと美穂は口の端にあくどい考えを含んだ笑みで言う。

「帰ってよ。会いに来たんでしょ。会ったんだから帰って。もう用は済んだわ。触っていいなんて言ってないんだから」

僕は美穂の膝の後ろでたまらずブブ、ブブ、と鼻を鳴らすテルヨと美穂を何度か見比べ、思考を定めようとしたが、しゃがんだ拍子に尿意が限界に達し、言われた事の意味さえ入ってこなかった。あああ・・・もう・・・下腹がきりきりと痛い。

「むおれる！」僕が言うと、美穂は甲高く平べったい声で目を見開き言った。

「はあっ？」

僕はテルヨを前にしながらも、突然の尿意のヒートアップ具合に意識さえ混濁し始め、どこにそんな力が残っていたのか美穂とテルヨを押しつけて、部屋の中に飛び込んだ。

出し切る最後の方で、放尿している先っちょの部分が締め付けられる痛みが走ったが、便器の中を黄色く濁しながら放出したものと引き換えに、僕の思考回路は正常に戻り始めた。

ふう、と大きく息を吐く。

あせりすぎて脱ぐ事が出来なかった右足のスニーカーを足から外し右手で持ち、トイレのドアノブをそっとまわした。

「最悪」

隙間から聞こえた声で美穂が怒っているのが顔を見なくてもわかる。

僕はトイレから出るのが怖くなり、便座の蓋を閉めその上に腰掛け、足元にスニーカーを置いた。

幼い時、母親が怒るたびに押入れに隠れ、母の怒りが収まるのを待っていた時と似ている。母はだいたい三十分程で怒りを消沈させ、いつもの優しい母に戻ると知っていたから、僕は押入れに入り心の中で歌を歌ったり、うとうとしてしまう位だった。

だが美穂は違う。僕が謝るまで、きっと何時間でも怒ったままだ。

謝ったって許してくれない時だってある。

これから僕がどういう風にすればいいか考えさせ、そのためにどういった行動を起こすべきか具体的に示すまで、僕を攻め続けるんだ。僕は頭脳明晰ではないし、だいいち美穂が怒っている理由すらわからない時が多いから、いつだってとんちんかんな発言をして喧嘩を長引かせてしまう。

「あんたって、ほんとに何にも変わってないのね」

思いのほか穏やかな美穂の声に僕は驚く。そして恐る恐るドアノブに手を掛け、扉を十センチ程開いてみる。見た限りでは扉の前で待ち構えているのではなさそうだ。

「ごめん」とりあえず謝ってみる。

「その癖、一生治らないね。大事な時にいつもトイレしたくなる、しかも急に」
言い終える瞬間の美穂の鼻で笑う音を聞き逃さなかった。笑った？美穂が？もう怒ってないのか？いや、油断しちゃいけない。美穂はアメと鞭を使い分けるのがうまいのだ。僕が気を許した隙に、また鞭を振りかざすかもしれない。

「そんなんじゃ出世できないよ、ほんと。もうちょっとさあ、こう……ん、まあいいや」
美穂が僕に助言するのさえ面倒になっているのだと察し、少し寂しくなる。

「どうせ別れたんだし、あんたが出世しようとしまいと、あたしには関係ないか」
投げやりな美穂の言葉の真意を探ろうと思うが、声のトーンがいやに低く落ち着いているのでわかりにくい。寂しそうにも聞こえたし、せいせいした、という風にも受け取れる。

「もう美穂には迷惑かけないと思うよ」

僕は言い、便座に座るとちょうど目の高さのところに張ってあるカレンダーを何気なく見た。二十五日のところに（テルヨシャンプー）と赤い字で書いてあって、その文字をなぞりながらテルヨのシャンプーをする日が以前のままで、いつも二人でしていたのを、この三ヶ月、美穂は一人でやっていたんだと思うと少し申し訳なく思った。

テルヨは短毛で、カットは必要無いが短い毛はよく抜けて、シャンプーの度に排水溝が詰まるし、ドライヤーを掛けるとテルヨは、いつもの穏やかさはどこかへ消えて、ドライヤーに向かってうなり声を上げる。噛み付こうともするから、テルヨを押さえつけるのに必死だった……美穂が。

「もうすぐシャンプーの日だね」

僕はなるべく明るく声を出す。返事がないのでトイレットペーパーを手にぐるぐる巻きつけ斜め下に引きちぎり、おでこの汗を拭き、鼻をかんだ。

「また泣いてんの？」

美穂が意外にも僕を心配し扉を向こうから開けた。鼻の周りをぐしゃぐしゃと紙でこする僕は、大きい方をしている時にトイレの扉を開けられた人のような格好だ。

「あんたって、ほんとばかよね」再び扉を閉められた僕は返す言葉が無い。

「テルヨにそんなに会いたかったの？」

扉を閉められたせいで汗がまた噴出し、美穂の声はくぐもって聞こえる。

「テルヨのことそんなに好き？」

好き？と言う言葉に反応し、テルヨが美穂に襲い掛かったようで、「テルちゃん、こら」と美穂が制す声が聞こえた。

テルヨは「好き」と言う言葉を聞くと、必ず顔を舐めに来るのだ。それは僕と美穂が、お互いに好きと言いまくり、キスをし、それを繰り返しているのを見ていたテルヨが、好きと言うのは顔を近づけ、口をくっつける事なのだと学習したせいだ。

キスをせがむテルヨを制し、美穂は扉を開け僕の方にテルヨを向かせた。美穂も床に座り込み、テルヨの脇を抱え立たせた。

テルヨの子豚のような薄いピンク色の腹がこちらに向けられている。小さな乳首が八つ付いている。

僕は改めてテルヨの可愛らしさに心を奪われる。

テルヨが僕たちの家にやってきたのは生後三ヶ月の時で、まだ骨に皮が張り付いているだけの貧弱ボディーで、顔のたるみも無く、すぐにキューンキューンと鳴くような弱虫のへなちょこだった。

トイレを覚えるのにも半年ほどかかり、カーペットのそこいらじゅうが黄色いシミで埋まり、柱は電信柱みたいにマーキングされた箇所が茶色く変色し、フローリングの床には板の繋ぎ目の隙間に入り込んだうんちが干からびて埋まっていて、僕も美穂も狂ったように犬に関係する本を読みあさり、トイレのトレーニングについて調べまくった。

全ての本に統一されたルールは無く、その場で叱れと書いている物もあれば、絶対に怒るなど書いている物もあった。メスなのに片足を上げてオシッコをする掟破りのテルヨに、既存のルールなど当てはまるわけが無いと、テルヨがクレートで寝静まった後美穂と、テルヨの躰について夜な夜な語り合った。

「テルちゃん、この人覚えてる？」

美穂がテルヨに話しかける。

「忘れるわけないよ、たった三ヶ月だ」

僕が言うと、テルヨは両足をバタつかせ、ムブブブっと鼻を鳴らした。「テルヨ！おいで！」たまらず僕が言い、両手を広げると、美穂の手を離れテルヨが駆け寄る。

テルヨ。
会いたかった。

僕はテルヨの脇の肌触りや、口の周りのたるんだ皮膚や、前足の肉球を、むさぼるように嗅ぎまわす。テルヨも、口の脇からよだれを流しながら、僕の脂ぎった顔を舐めまわして喜んだ。僕は、テルヨが犬であるより、フレンチブルドックであるより、テルヨ、という生き物なのだという方がしっくり来ると思っている。

テルヨもきっと、自分が犬とは思ってないのだろう。僕の枕に頭を乗せて寝ていたし、ご飯の後には必ず歯磨きもしていた。僕たちがテレビに夢中になると、座って一緒に画面を見ていたし、会話に夢中になるとテルヨもブウブウいって仲間に入りたがった。テルヨがいて、僕はとても幸せだったんだ。

「信ちゃん」
いつまでもテルヨと激しい抱擁をする僕に、美穂は今日始めて名前呼びかけた。

「信ちゃんはテルヨと一緒に居たいの？私じゃなくて」
「……」
「本当に、テルヨだけ取り上げに来たの？」
テルヨのまん丸の黒目が僕を見る。おい、そうなのか？と語りかけているようだ。

「あたしが、なんで出てって言ったかわかった？」おい、わかるのか？
「信ちゃん、あたしのこと、どう思ってるの？」おい、どうなんだ？ブウ。
テルヨの右の鼻の穴から鼻水が一筋吹き出た。
「信ちゃん、テルヨテルヨって、そればかり」
「そんな事無いよ、俺は……俺は美穂の事も大事にしてきた」
「嘘！」うそだ、ブウ。

「あたしが包丁で指切った時の事覚えてる？」
「覚えてるさ、血がいっぱい出て、かわいそうだった」
「そうよ、血がいっぱい出たの。切って、皮膚が包丁について、それであたしが信ちゃんを呼んだ時、信ちゃんなんて言った？」
「……大……丈夫？」
「違う！信ちゃん、黙れって言ったのよ！テルヨが、テルヨがトイレでウンチしたから、今褒めなきゃ駄目だから、静かにしろって！」
「そうだったっけ？」
「そうよ！」美穂はその時切った左手の人差し指の傷を僕に突き出して見せた。そして、下唇を噛んで何かを堪えている。

「悪い……」僕はテルヨを抱きしめたまま、その時の事を思い出そうとしたが、テルヨがウンチを成功させた時と、美穂が指を切った時の事が同時だったか思い出せない。

「信ちゃんは、ほんとにテルヨのことだけが、好きなのね」

テルヨを大切に、と美穂に約束した僕は、テルヨを抱いて美穂の部屋を後にした。

三分の二程残っていたドッグフードの袋と、フィラリアの薬2か月分をスーパーの袋に入れ、僕に手渡した時の美穂の顔が、あまりにも切なそうだったので心が痛んだ。僕にとってテルヨが宝物だったように、美穂にとってもかけがえの無いものだったに違いない。

僕は、テルヨを奪い返す事で頭がいっぱいでろくに景色さえ見ずに走ってきた道を、テルヨを腕から下ろして一緒にとぼとぼと歩く。

テルチャン、いい子にするのよ。
いたずらばっかりしちゃだめよ。

美穂の中に完全に芽生えた母性本能というやつが、僕に向けられた事のない母親のような甘い声をテルヨに投げかけ、その声をいつまでも僕は頭の中で反芻してしまう。

テルヨは突然の散歩に喜びを隠せないようで、次第にリードをぐいぐい引っ張りながら突き進んだ。十キロと少しあるテルヨの体重が前へ突進するとすごい力で、リードを巻きつけた僕の右手は引っ張られるたびに手首に食い込み、ジンジンと痛みが走る。

「テルヨ、ゆっくり行こうよ」
話しかけてもテルヨは、振り向く事も無くアグレッシブに見るもの全ての匂いを嗅いで回る。

民家が連なる細い路地は、駐車している車のせいで対向車線を行きかう車がそれぞれ、譲ったり、譲られたりしながら僕とテルヨをたびたびライトで照らして通り過ぎる。
僕の計画はまったく無駄に終わったものの、目的は完全に果たした。

僕はテルヨを取り戻したのだ。
それなのに、僕の心はなんだかすっきりしない。それどころか、まだ何かが欠けている気がして、心細くなる。たまに振り返って僕を見るテルヨの目は、そんな僕の心をまるで見透かしているようだ。

そもそも、テルヨを飼おうと決断したのも、僕と美穂の間に家族になるという意識が芽生えたからで、テルヨの十五年前後の人生を、僕たちは最後まで一緒に見届けようと約束したのだ。そして僕たちに子供が生まれ、また家族が増える事を望み、それに向かって暮らしているつもりだったのに。

僕が美穂と別れてからあわてて借りたアパートの前に着いた時には、僕の右手が少ししびれ始めていて、僕がした行為の代償はこんな痛みくらいではすまないのだと美穂のいない未来を思い、ようやく気付く。

欠けていたもの、それは、テルヨだけでは埋められない。

立ち止まる僕を、テルヨはお座りをして見ている。ポケットに入れていた骨形ビスケットの事を思い出し、テルヨに差し出すと、そんなものいらない、と今来た道の方を向いた。

ハア、ハア、と上がった体温を調節しながら、何もかも、お見通しの顔で。

そういえば、お座りを最初にさせたのは美穂で、初めて出来た時、美穂はものすごく嬉しそうだった。信ちゃん、テルヨは私たちの言葉を、理解しているのよって。

「テルヨ、行くか」

僕が言うと、馬のように身震いして立ち上がり、今来た道を見据え、鼻をぺろりと舐めた。こうなる事をわかっていたようなテルヨは、少し笑っているようにも見える。

「よし」

僕が言うと、テルヨは走り出す。僕は左手でぶら下げていたスーパーの袋を脇に抱え、テルヨと一緒に走り出した。

「美穂、待ってろよ！」

了